

南九十九里浜 養浜計画



平成21年3月

千葉県

はじめに

南九十九里浜では 1990 年代から海岸侵食が顕著となったため、海岸保全を目的にヘッドランドによる侵食対策を鋭意講じてきました。事業着手から約 20 年が経過した現在、対策区間である一宮海岸では施設の整備効果によって侵食速度の低減が図られましたが、依然として局所的な汀線後退や浜崖の形成が進み、さらに漂砂下手側の一松海岸以北では侵食域が年々拡大しつつあります。これは、夷隅川や太東崎からの土砂供給が枯渇したためであり、このままでは海岸保全どころか更なる侵食の進行と侵食域の拡大は否めません。また、海岸侵食の進行と時期を同じくするように、海域での貝類の漁獲量が減少している箇所もあります。そのため、侵食による海底地形や底質の変化が貝類の生息環境に影響を与える可能性も考えられます。

そこで千葉県では平成 16 年度より、枯渇した土砂供給を人為的に代替するための「養浜」の実施に向けて調査検討に着手し、砂浜の現状と今後の見通し、ならびに、養浜の有用性について検討してきました。「南九十九里浜養浜計画」はこれらを総括的に取りまとめ、海岸侵食のメカニズムと養浜の基本的な考え方、事業実施に向けた課題等の概要を示しています。

九十九里浜は、自然の外力から地域の安全を守る緩衝帯としてだけでなく、生物の生息環境、漁業やレクリエーションの場としての役割を持つ、未来に継承すべき貴重な資源です。これら九十九里浜の砂浜が持つ多様な役割の維持・回復には、養浜が永続的に実施できるシステムを構築してゆかなければなりません。

九十九里浜の再生に向けて、本計画書が広く活用されることを希望します。

平成 21 年 3 月

「南九十九里浜養浜計画策定会議」委員一同

<目次>

はじめに	1
1. 九十九里浜の成り立ち	2
2. 海岸侵食の現状	
2.1 時系列的な侵食状況	3
2.2 侵食要因	5
2.3 海岸保全（防護・環境・利用面）への影響	6
2.4 海岸施設の整備状況	8
3. 今後の見通しと解決方策	
3.1 九十九里浜全体の見通し	9
3.2 南九十九里浜での見通し	10
3.3 課題の整理	11
3.4 解決方策	12
4. 南九十九里浜における養浜	
4.1 対策の基本方針	17
4.2 砂浜回復の目標	18
4.3 現状の課題と地区優先度	20
4.4 施工方法	25
4.5 環境影響評価方針	26
資料編	29

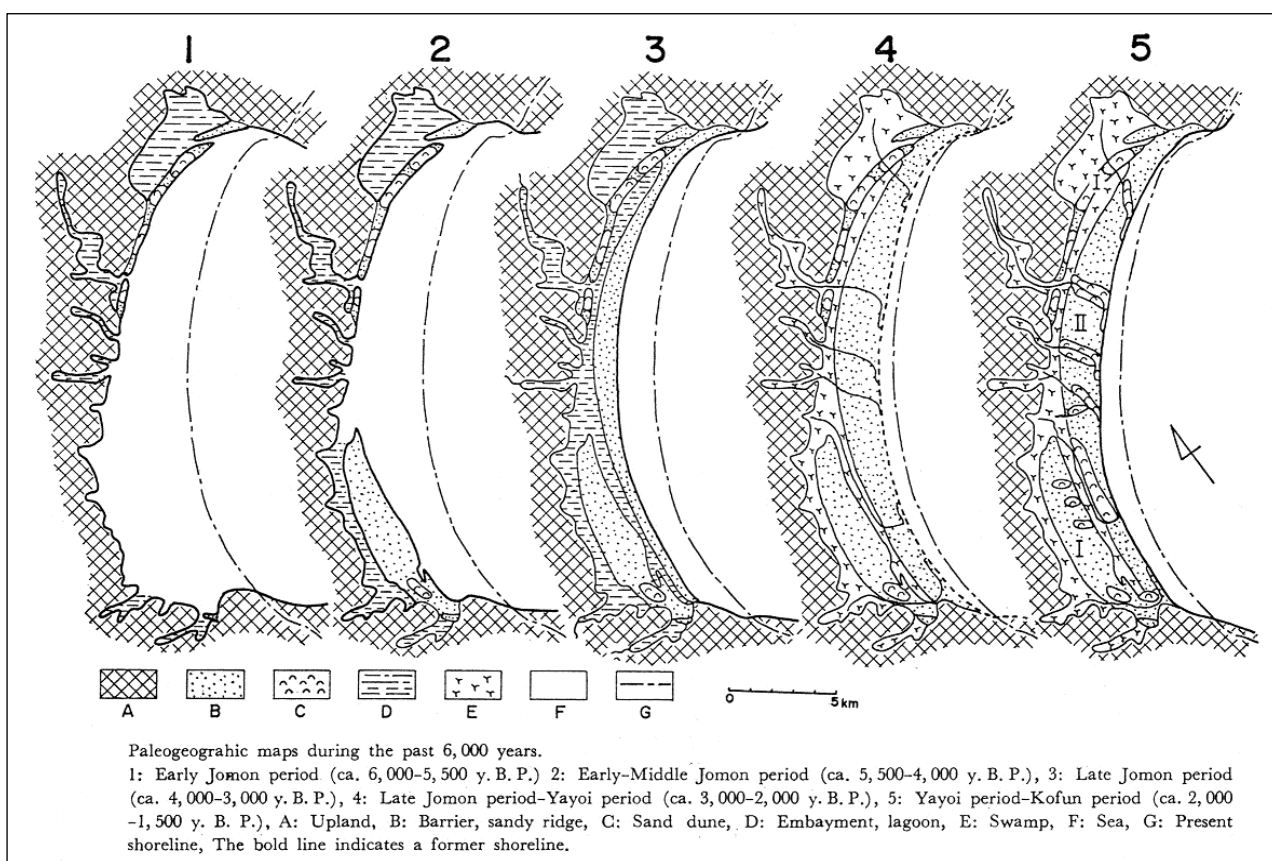
1. 九十九里浜の成り立ち

「日本の海岸はいま」より引用

九十九里浜は屏風ヶ浦と太東崎に挟まれたお椀のような形状をしています。このお椀のような形状の海岸線に波が入射すると、波はお椀の縁をすべるように両側から中央部へ向かう流れ（沿岸流）となります。

およそ2万年前に最後の氷河期が終わった後、海面上昇が生じ、約6,000年前に現在の海面の高さになりました。それ以降、屏風ヶ浦と太東崎の海食崖、

ならびに夷隅川流域から供給された土砂は、この流れによって徐々に運ばれ、約6,000年かけて現在の海岸線が形成されたと考えられています。



「過去約6,000年間の九十九里浜平野の発達史（千葉県史より引用（森脇，1979））」